

<事例 2>

C さん 40 歳（女性）。小学 4 年生の D 子さんと二人暮らし。夫とは離別。

C さんは夫と離婚後、子育てをしながら仕事と家事を精いっぱいこなしています。生活費を賄うため、ダブルワークで就労しているため、子供と話す時間もなかなかとれない状況です。近くには親しくしている人もいないため、子育てや家事について気軽に相談できる人もいません。D 子さんは小学 3 年生まで学校内にある学童クラブに通っていましたが、4 年生になり友達と遊びたいと学童クラブは卒業しました。C さんは D 子さんが一人で留守番することに不安を感じていましたが、近くに相談する人がいなかったこと、D 子さんの自立心を大事にしたい気持ちから様子を見ることにしました。D 子さんも最初は友達と遊ぶことでさみしい気持ちも紛らわしていましたが、仕事で帰りが遅く、一人で夕食を食べる日が増えてくると「お母さん仕事ばかり」と C さんに気持ちをぶつける機会が増えてきました。C さんは学童へのお迎えがなくなったことで、仕事の時間を延ばしたため、帰宅時間が遅くなっていました。そのことで C さんと D 子さんの関係に変化が生じていました。

D 子さんの様子の変化に気づきながらも、なかなか仕事から帰宅できない日が続いたある日、D 子さんが「E 子さん、明日公民館にカレー食べに行くんだって。わたしも行きたいなあ」と話してくれました。「公民館でカレー？」と聞くと、「夜のご飯食べに、お母さんに行くんだって」と説明してくれました。インターネットで調べると、多世代食堂「ふれあい処」が公民館で週 1 回開かれていると書いてありました。D 子さんとの関係に不安を感じていた C さんは、翌日、D 子さんと、公民館に出かけてみることにしました。

久しぶりに C さんと外出できる D 子さんは公民館への道すがら学校の様子を楽しそうに話してくれています。公民館では、子供から高齢者まであらゆる世代の人が一緒にカレーを食べていました。C さんと D 子さんが席を探していると、E 子さんが声をかけてくれました。D 子さんは嬉しそうに同じテーブルに着席。C さんも同じ席に座ると E 子さんのお母さんが声をかけてくれました。一緒にカレーを食べながら、話をしているうちに、E 子さんのお母さんも一人で子育てをしている C さんと同じ環境であることがわかりました。C さんは、日ごろの子育てや学校の話などをしていただけでしたが、気持ちが少し軽くなるように感じました。一緒に食事をし、日ごろの様子を話す時間を持つことの大事さを感じ、隣で笑顔でカレーを食べている D 子さんの様子を見ながら、「また来週も来てみようか」と声をかけると D 子さんも嬉しそうに「うん」と答えてくれました。

翌週、C さんと D 子さんがふれあい処へ出かけると、E 子さん親子が先に着席していました。D 子さんを見つけて E 子さんが声をかけてくれます。一緒にカレーを食べて、日ごろの会話を交わし自宅へ戻ります。C さんにとっては D 子さんと一緒にゆっくりと夕食が取れる大事な時間です。そして日ごろの子育てや学校のことなど情報交換ができる場でもあります。週 1 回ではありますが、仕事の調整をしながら D 子さんと参加を続けてみようと考えています。